

和音の本音

KAZUNE SHIMIZU - TRUE NOTES

ピアニストの清水和音さんの新連載がスタート！音楽やピアノのこのみならず話題は多岐にわたりますが、キーワードは「本音」。常に歯に衣着せず、本音で生きてきた清水和音さん。人生を振り返りながら、様々な視点に立ってお話し頂きます。そして、読者の皆さんからの様々な質問にもお答え頂きますので、清水和音さんへの質問をどしどしお寄せ下さい。聞き手は本誌でもお馴染みの青澤隆明さんです。

ききて・文=青澤隆明
Text=Takaakira Aosawa

#1

「ピアニストなんて、
ずっとやめたいと思ってきた。」

本当の音、本当のいふ。

清水和音と話すのは、いつも楽しい。どうしてかはわからないけれど、彼が話し上手で、愉快な人だからというだけではなさそう。ピアニストとしての彼への信頼があり、そこにはまず、人としての共感が確かにある。

話をするようになるずいぶん前から、清水和音のピアノを聴いてきたわけで、彼の演奏と彼という人間が分かちがたく結びついていると感じながら、私はそのどちらにも長らく惹かれてきたことになった。面白おかしい語り口も、音楽家としての生真面目さと、つねに一体のものとして響いてくる。

もちろん、清水和音のピアノは、彼の陽気な話しぶりのようには饒舌ではなく、芯を見据えた端正な抑制を貫いている。身をもち崩したりすることはない。そこに作曲家という人間がいて、作品や楽譜に向き合うのだから、当然のことではある。ベートーヴェンやショパンの背中越しになにか余計なことを言うくらいなら、彼はピアニストになどなっていないかっただろう。

それは話をしてるときもいつしよ、いまの自分のことを話すとき、とくに彼自身の演奏について話すとき、清水和音はどこか居心地がわるそうに見えるし、隙あらば話題を逸らそうとする。さつき演奏を聴いたのだから、それでぜんぶわかるだろう、という頑なさもどこかに感じさせる。音楽が語ることは、音で語られるべきなのだ、というきつぱりした姿勢だ。

音楽に関しては、そこに出ているのがすべて。彼の人生のすべてとは言えないにしても、ほんとうに大事な部分は自然とそこに表れている。自分で説明したり、まして弁明したりするようなものではなく、作曲家が思いを楽譜に籠めたように、ピアニストも自分の演奏ですべてが語られなくて嘘だということだろう。

過去や現在の演奏家や、友人たちの話をしてるときは、決してこうではない。好きな人やものごとの話をしてるときは清水和音は、とても雄弁で、楽しみにみえる。他人は他人ということを抑えたいうえで、人間に対する愛情に満ちているのが、そうした話をいつそつ愉快にする。さて、「和音の本音」である。連載の企画を聞いたとたんに、このタイトルを思い

ついたので、自分の名前がつくのは嫌だ、と清水和音は呟いた。「本音」というのは「本当の音」という意味だから。そう言って、これから彼自身についての話をたずねていくことにした。還暦も近づいてきたいまの清水和音だからこそ語られる、さまざまな人生の経験もあるはずだ。ときにストリートに、ときにまわり道をしながら、音楽家としての本音を聞ければと思う。

前口上はそれくらいにして、では、和音さん、どうぞ——。

ずっとやめたいと思ってきた。

ピアニストとして仕事を始めてから、今年で36年。よくもこれだけ長く続けてこられたと思います。ずっとやめたいと思いつながら、これまでやってきた。それがほんとうのところ。

まあ、ほかのことができないっていうのが大前提にあるんだけど、毎回本番の前になるとつらい思いをして、舞台の上に出ていくのも嫌で嫌でしょうがない(笑)。なんなんだろう、自分でもよくわかんないね。

若い頃、仕事を始めたばかりの頃は、